

豊かな緑とともに
新しいまちづくりに向けて



多古町

両総用水事業推進協議会 監事
多古町長 菅澤英毅



多古町は、北総台地の東側に位置し、町中央部を南北に流れる栗山川流域は水田地帯が広がり、肥沃な土壌で育った多古米は、味の良さから「おかずのいらぬ米」や「冷めてもおいしい米」と称され、「シャリなら多古米」と言うお寿司屋さんもいるほどです。また、北部及び東部は台地が広がる畑作地帯となっており、強い粘りと豊かな風味が特徴であるやまと芋をはじめ、サツマイモ、ニンジン、ジャガイモなど農業が盛んな町として知られております。

中心市街地に隣接する多古台では、住宅開発により150戸余りが分譲され、商業施設がオープンし新たなコミュニティ作りが進む中、バスターミナルや多古こども園の整備、多古幹部交番の移転などさらなる発展が期待されているところです。

道の駅多古は、平成13年9月に開業して以来、農産物等の直売所や情報発信の場として親しまれ、地元農産物を使用したレストランも平成27年12月にリニューアルオープンし、潤いのある水辺環境を活用した栗山川遊歩道、周辺の歴史建造物やロケ地などを、レンタサイクルでめぐる方も多くなりました。また、あじさい祭りや多古米まつりなどの各種イベントも開催され、道の駅が観光の拠点として多様な機能が求められてきております。

このように、今の多古町農業の礎となったのは、明治34年に全国で2番目となる耕地整理が実施されたことです。整然と見事なまでにきれいに耕地整理された田んぼは、当時としては非常に珍しかったので、多古町の耕地整理の様子を堀江正章氏が描いた耕地

整理図が、博覧会で入賞され千葉県立美術館に所蔵されています。

多古米は、古くは江戸時代からその味の良さが評判となり、栗山川沿いの豊かな土壌は、ミネラル分が多い粘土質で、両総用水の安定した水利により、米作りには最適とされ、昭和の時代には天皇陛下の献上米に選ばれ、「全国自主米品評会」では食味日本一にも輝き、良質な米の産地として広く知られるようになりました。現在も、町内には米作りの研究グループがいくつもあり、平成9年には「ライスセンター」も設立されるなど、さらなる食味向上をめざしています。

今後、成田国際空港の機能強化や首都圏中央連絡自動車道の整備により、人・ものの流れが変わり、周辺環境も大きく変革していくことが予想され、これらのポテンシャルを活かした新たなまちづくりが重要と考えております。

平成25年度に策定した「多古町成田国際空港東側地域戦略構想」を、近年の機能強化の動向を踏まえて改訂し、戦略的なプランを実行することで、町民の誰もが豊かさを享受できるまちづくりに取り組んでまいります。

発展が進む多古台



道の駅多古 あじさい館(多古町の花:「あじさい」)